山中為綱
慶長18(1613)年～天和2(1682)年

雲出川下流域での水利の功労者である西嶋八兵衛の活躍から、やや時を置いて、津藩の2代藩主藤堂高次に仕えた家臣が山中為綱です。為綱は、雲出川の中流域（一志･白山地域）での治水事業や井水開削、新田開発に尽力した人物です。

瀬戸ケ淵の開削

白山町北家城の瀬戸ケ淵は、両岸の岩盤が迫り流路が狭くなっていて、大雨ごとに水が氾濫して洪水を引き起こす場所でした。一志郡奉行であった為綱は、この岩盤を削り、川の流れをスムーズにする難工事を3年の歳月をかけて成し遂げました。また、その上流に井堰を設けて下流の水田に水を流す井水を開削し、家城と川口の両地区の灌漑用水を設けました。これによって4,000石近くの石高が確保されることとなり、その恩恵は津藩だけでなく紀州藩の領域にももたらされました。

為綱が工事を行うまでは、水路が狭く、たびたび氾濫を起こしていた瀬戸ケ淵

高野井の整備

為綱が指揮した井水開削はこれだけではなく、一志町高野には高野井を設けています。これは、肥沃（ひよく）ではあるものの時折干ばつの被害を受ける村の庄屋からの願い出に応じ、自ら水路を調査し、工法を研究して新たに取水口（現在の高野井）を設けて雲出川の水を引き入れたものです。約2.7㎞に及ぶ水路を整備し、9年にわたる工事を完成させました。

一志町高野にある現在の高野井堰。為綱による高野井の整備により、この辺りの村の干ばつの心配がなくなった

これによってそれまでの4倍の面積にあたる8カ村の480ヘクタールの水田が潤い、以後は干ばつの心配がなくなったといわれます。

そして24年にわたって伊勢国の奉行職にあった為綱のもう一つの功績が、伊勢国内のさまざまな地誌情報を網羅（もう）した「勢陽雑記（せいようざっき）」を著したことです。ここに記された種々の地誌に関する情報は、三重県の歴史や風土を探る上でも重要な内容を含んでいます。

現在の高野井堰の近くにある高野井記念碑。為綱の功績をもとにした土地改良や灌漑整備の歴史をうかがうことができる

その後、伊賀奉行に転じた為綱は、天和2(1682)年に70歳で亡くなりましたが、雲出川の中流域の開発に関わったその功績は現在にも伝えられています。

江戸時代の雲出川下流地域（現在の津地域南部、久居･香良洲･一志地域）を描いた一志郡領村之図（樋田清砂氏所蔵）
※この図は西が上になっています。